

講義名	比較文化論			授業形態	
担当教員	植野 加代子	開講期・曜日・時限	前期 火曜日 3 時限		
		単位数	2	履修開始年次	2 年生
				ナンバリング・コード	

主題と概要
比較文化論では、日本文化と異文化を比較するだけでなく、文化が形成されていった背景や意味を考えることを主題とする。 この講義では、東南アジアや日本の庶民の生活文化を、文献資料だけではなくフィールドワーク・写真・映像資料等を用いて、各国の文化や習慣など伝統的な生活文化を取り上げて紹介する。その過程で、東南アジアと日本の生活文化の相違点や類似点に目を向け、文化の意味を探りながら、社会・宗教・地域性などにも着目し、講義を進める。

到達目標
東南アジア各地の事例をとおして、文化の多様性と普遍性について知り、当たり前だと思っていた自国の文化に対する新たな見方ができるようになる。さらに、異文化を知ることによって思考力や想像力の幅を広げ、自由な発想や知識を生み出すことを身につけることができるようになる。

提出課題
講義では、毎回、感想文や課題などを記入し、小レポートとして提出してもらい、小レポートの提出課題は講義ごとに伝える。 小レポートとは別に、講義に関連した事柄について、興味のある国と日本を比較するレポートの提出を求める。レポート課題などの詳細については、別途、講義中の説明ならびにRYUKA Portal を通じて指示する。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法
毎回の講義で書いてもらう小レポートの内容は、提出後に講義内で、比較文化論の事例の一つとして紹介する。

評価の基準
評価は、以下の2点を総合しておこなう。 平常点として、毎回(15回分)の小レポート（60点） 課題レポート（40点） 評価の基準は、第1回目の講義時にシラバスの用紙を配付し、詳細を伝える。

履修にあたっての注意・助言他
講義中に学んだことを、日常生活の中でも実際にどういう場面があるかを考えてみることを、講義中、私語などをし、他人の学習の妨害をしないこと。そのような、受講態度が好ましくない学生には退学を求めることがある。

教科書
.使用しない。

参考図書
.なし。

--	--	--	--	--

その他
【資料】 各自、プリント資料を配布する。 【参考文献】 講義中に適宜紹介する。

授業計画
1. 比較文化論とは 異文化理解 2. タイの文化 仏教道場と世界遺産 3. タイの文化 仏教寺院と人々の暮らし 4. タイの文化 市場と水マーケット 5. タイの文化 少数民族の生活 6. インドネシアの文化 信仰 7. インドネシアの文化 路上生活と女性 8. インドネシアの文化 婚姻 9. カンボジアの文化 水上生活の暮らし 10. ラオスの文化 年中行事 1 11. ラオスの文化 年中行事 2 12. ラオスの文化 少数民族の生活 13. 東南アジアの文化 棚田の利用 14. 東南アジアの文化 伝統芸能 15. 東南アジアの文化 南米貿易

授業形態（アクティブ・ラーニング）			
	ア：PBL（課題解決型学習）	○	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	ウ：ディスカッション、ディベート		エ：グループワーク
	オ：プレゼンテーション		カ：実習、フィールドワーク
	キ：その他（A L 型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）		

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間
【予習】 講義で取り扱う各国の概要や興味ある事柄をあらかじめ各自で調べる(約2時間)。 【復習】 講義終了時、講義内容に関わる小レポートを記入する。また、各自で講義から得た各国の文化と自国の文化を比較し、相違点や類似点を考えたりする(約2時間)。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連
諸外国の習慣や文化を知ることにより、新しい視点や豊かな発想によって、新たな価値を生み出すことができる。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述
この講義は、板書・プリント資料を用いた形式で進める。また、毎回の授業において、受講生自らの感想や考えなどを用紙に記入する時間を設ける。

実務経験の有無及び活用
実務経験あり、東南アジア諸国の日本語学科の学生に指導するだけでなく、学生や地域の人々と日常生活や行事などを一緒に体験したり現地で教えてもらった。その他、東南アジアだけではなく、インド・ブータン王国・ヨーロッパ諸国などへ現地調査に行った実地経験を有しており、その経験を活用し、講義を行う。

備考
講義の進め方の詳細は、第1回目の授業で説明をする。 感染防止のため、教室では、座席の間隔をあけたり、教室の換気や手の消毒などを徹底する。 この講義では、世界の生活習慣がすべてテーマとして扱える。そのため、日々の生活をなげなく過ごすのではなく、日頃から生活習慣・文化・行事などに関心や興味を持って生活するように心がけられている。受講生1人1人の日常生活もすべて資料となるため、各国の特色を皆さんと一緒に考えていきたい。